

市村到君（4組）の新刊（『外国語教授法と英語教育』）紹介

上原 昇（2組）

市村到君（4組、御代田町在住）が、昨年の『戦国三代と天下人～芦田（依田）氏の軌跡から』に引き続き、今年も著書を上梓しました。

今回出版したのは、市村君の本業である英語教育に関する専門書です。

『外国語教授法と英語教育』と題する本著は、一般社団法人信州教育出版社から本年10月29日に発刊されました。

本著の副題は「英語教育の達人をめざす教師に送るエール」とあり、出版社のHP(<http://www.shinkyu-pub.or.jp/book/4009.html>)には「長年、英語教師を務め研究してきた数々の外国語教授法についてまとめるとともに、これまでとこれからの英語教育について考え方を綴る。現役の英語教師に携わる人々に向けての願いが込められている。」とあります。

本著の内容は2部から構成され、第1部では外国語教授法について内外42のメソッド、アプローチについて解説しています。

第2部は英語教育についての変遷について分かり易く記述しています。

小学校からの英語教育や、コロナ禍の中での教育の難しさなど、現代における教育の課題についても触れています。

私は英語教育について門外漢なので、中身を十分理解することはできませんが、「英語での授業には『哲学』が必要」、「英語教師は教育の達人を目指して励め」という著者の想いに共感しました。

英語といえば、私自身は中学から大学まで10年間学んだ割に身につけませんでした。

これは教える側の先生が悪かったのか、教わる側の私が悪かったのか。

高校時代のクラス担任だったお二人の先生はいずれも英語の教師だったことをしても、答えは自明で後者です。

最後に、「本著を高校～大学～英語教師時代を共に歩み、定年退職後まもなく逝きし盟友・武井一義君（8組、更埴市出身：編集者注）の御魂に捧げます」とありました。



以下は、筆者(市村到君)から寄せられたコメントです。

サブタイトルの「英語教育の達人をめざす教師におくるエール」ということが、拙著のねらいです。理想を持ちながらも、教室で日々現実の厳しい壁にぶつかりながら生徒とともに歩む英語教師に、自信と使命感を持ってほしいということが、そもそもの発端です。

その中で、大学初年（昭和42年）から現在（令和3年）まで50年間続けて購読してきた月刊『英語教育』（大修館書店）の主だった事項を整理したページもあります。英語教育の動向を振り返り、今後に生かしていただければという願いからです。

今回、上原昇君によって、65期ホームページで紹介していただきましたこと、若干の気恥ずかしさと大いなる感謝を表すものです。

以上

(21年12月13日記)